

前田道路・今泉社長(湯沢市出身)に聞く

舗装大手の前田道路(東京)の社長に今年6月、湯沢市生まれの今泉保彦氏(62)が就任した。今泉氏は、株式公開買い付け(TOB)で前田道路を連結子会社化した前田建設工業(東京)の出身。同社出身で会長に就任した福田幸二郎氏(70)と共に、会社をどう導くのか手腕が注目される。展望などを東京・大崎の本社で聞いた。

◇

―就任から3カ月たった。「早期に全国の営業所や工場に行くつもりだったが、新型コロナウイルスの影響で、できなくなりました。まだ社内のいろんな人に会えていない。現場を自分の目で見て、人と話をしたりしなければ状況把握は難しい。今後は『ウィズコロナ』の対策をきちんと取って、足を運んでいきたい」

「人づくり」にこだわる

―大手トップとして取り組む課題は。

「経営課題はさまざまあるが、一番は人材育成。教育体系や研修制度など社内の仕組みを整えていく。情報化、デジタル化も行き着く所は人。

グループ化によって事業の垣根を越えた人員配置も可能に

な。より適材適所で能力を発揮できる体制になった。現場の人手不足や高齢化には危機感を持っており『人づくり』に特にこだわっている」

―グループの一体感をどうつくるか。

「前田建設は土木建築に加えてコンセッション(公共施設を民間企業が運営する)事業に早くから取り組み、ICT化・ICT化も進めてきた。一方、前田道路は本業である道路建設やアスファルト合材の供給など現場サイドの『稼ぐ力』が強く、協力企業の大

半が専属で取引しているのが大きな強み。双方の特長を互いにフィードバックし、総合インフラサービス企業として相乗効果を出せればいい」

―故郷への思いは。

「実家周辺は豪雪地域。長い冬の中で、粘り強さや勤勉性が自然に育まれた。雪解けで道路が見えてきた時は、何とも言えない解放感があった。人口減少や少子高齢化で街は寂しくなったが、四季の移ろいに情緒があり、風景の美しさは変わらない。県境を越えた周遊観光の強化などで元気になってほしい」

(聞き手)小松田直嗣



いまいずみ・やすひこ 57年生まれ。山田中・湯沢高―成蹊大卒。81年、前田建設工業入社。品質管理部門や秘書室勤務などを経て、13年から常務執行役員建築事業本部営業担当、取締役専務執行役員建築事業本部長など歴任。今年5月に前田道路の顧問に就き、6月から現職。